様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２１ 日現在

機関番号：３３９０５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ１０６３７

研究課題名（和文）4年間の地域包括的ケア体験学習プログラムの構築と看護OSCEによる評価

研究課題名（英文）Developmennt of a four-year community comprehensive care experiential learning program and evaluation by nursing OSCE

研究代表者
阿部　恵子（ABE, KEIKO）

金城学院大学・看護学部・教授

研究者番号：００４４４２７４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：高齢者と適切にコミュニケーションができるように、段階的コミュニケーション教育を構築することを目的とした。１年次の高齢SP参加型看護面接演習前後のコミュニケーションスキル自己評価では有意な上昇が見られた。１年次初期のコミュニケーション教育の有用性が示された。
年度末の看護OSCEではクラブ活動経験者にコミュニケーション得点が有意に高かった。また、コミュニケーション能力尺度得点と看護OSCE得点との相関が示されなかった。手技とコミュニケーションの多重タスクの経験が未熟であることが要因と考えられる。２、３年次では症例別演習、４年次では多職種連携教育によるコミュニケーション教育プログラムを提案する。

研究成果の学術的意義や社会的意義
超高齢社会において、医療・福祉・介護領域で高齢者のニーズに合わせたコミュニケーションやケアを実践できる医療人の育成が求められている。本研究の結果から低学年から高齢SPと演習をすることで、高齢者に寄り添った共感、受容、傾聴スキルが育成されることが示された。また、手技とコミュニケーションの多重タスクの経験が未熟であることが明らかとなったことから２、３年次では症例別演習による多重タスクの反復練習、４年次では多職種連携教育によるコミュニケーション教育を継続することで、高齢者ケアに対応できるコミュニケーション能力と実践力を修得できる可能性がある点は、社会的に意義がある教育プログラムと考える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to construct a step-by-step communication education to enable appropriate communication with the elderly. A significant increase was found in the self-evaluation of communication skills before and after the first-year elderly SP based nursing interview practice. The communication education in the early first year is useful.
In the nursing OSCE at the end of the academic year, communication scores were significantly higher for those who experienced club activities. However, there was no correlation between communication competence scores and nursing OSCE scores. It’s factor would be immaturity in the experience of multiple tasks of care and communication. In the 2nd and 3rd years, we propose a case-specific exercise, and in the 4th year, we propose a communication education program through interprofessional education.

研究分野：医療者教育、コミュニケーション教育

キーワード：コミュニケーション　模擬患者　高齢者　地域包括ケア　看護面接　看護OSCE

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１、研究開始当時の背景

超高齢社会である我が国において、2003 年から推奨されてきた地域包括ケアシステムは、現在 20 年を迎える。このケアシステムは、住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最期まで出来ることを目指して、国が構築したシステムである。地域において， 看護師が医療と介護をつなぐ重要な役割を担うとして，日本看護協会は，「訪問看護アクションプラン 2025」を策定している。このような背景から高齢者のケアに直接携わる看護師への期待が高まっている。

2019 年の看護基礎教育検討会報告書で，コミュニケーション能力の強化と，対象や療養の場の多様性に対応できるよう「地域・在宅看護論」の内容の充実が挙げられている（厚生労働，2019）。既に在宅訪問領域に新卒看護師の入職が始まっている中、病院だけでなく施設や在宅など、様々な臨床現場で、多様な高齢患者に適切に対応できる高い看護実践能力を備えた人材育成が求められている。地域・在宅看護の看護実践の場で多くを占める高齢者との関係構築の基盤となるコミュニケーション教育を早い段階から実施し， 看護学生が卒業するまでに高齢者とのコミュニケーション技術を身につけることが望ましいと考える。

一方、核家族化，コミュニケーションの希薄化，そして，現代の IT 化の影響など、看護学生においても基本的な生活能力や常識，学力の変化と同時にコミュニケーション能力の不足を課題として挙げている（厚生労働省，2007）。また、看護学生の生活体験に関する教員の認識調査によると「周囲に無関心で対人関係が希薄」「価値観の多様性を認められない」「一般常識やマナーの低下」「IT を活用することが得意」などの特徴が報告されている。このような学生の生活体験の乏しさに加えて，看護基礎教育におけるコミュニケーションを反復練習する機会の減少により，卒業時の看護実践能力が低下している可能性が考えられる。地域のニーズに対応できる看護師の育成には，このような看護学生の特徴を踏まえた上で教育方略を検討し，看護学生の高齢者を支援する看護実践能力を育成することが求められている。

しかし、看護基礎教育におけるコミュニケーション教育の多くは，看護技術演習で付随的に行われているため，看護学生にとって，コミュニケーションを技能として意識されにくい。近年，看護学生のコミュニケーション技術演習として，SP の参加による体験学習が増加し，その効果が報告されている（岩﨑ら，2021；松本ら，2020）が、単発的な体験学習がほとんどである。コミュニケーション技術を，コミュニケーション学として看護学 1 年次生から 4 年次まで継続的に学修することが必要と考える。４年間のコミュニケーション教育プログラムを構築し、その効果を看護 OSCE で評価した報告はない。

本研究では、このような背景のもと研究計画を立案したが、2020 年度の新型コロナ感染症拡大防止のため大学の講義演習は、遠隔授業となり、模擬患者という外部の社会資源を用いた演習の展開は 2022 年度まで実施できなかった。その代替策として、看護面接の「改善が必要な面接」と「良い面接」の動画を作成し、トランスクリプトをもとにコミュニケーションスキルの分析を行い、オンライン上にて、学生同士による看護面接を行った。

２、研究目的

看護学生が，高齢 SP との看護面接演習で，どのような気づきや学びを得ているかを質的に分析にし、また看護 OSCE にて客観的評価を行い、コミュニケーション能力の変化を明らかにする。その結果をもとに、４年間の看護コミュニケーション教育プログラムを構築することである。

３、研究方法

１）Kolb の経験学習モデルをもとに、１年次生を対象に高齢 SP との看護面接演習（3 分準備＋７分間の看護面接＋10 分間のフィードバック）を実施する。演習の前後でコミュニケーションスキルの自己評価を行い、量的統計解析により対応のある２群比較にて効果を測定した。高齢 SP のシナリオは下記の通りである。50～70 代の一般市民の SP15 名（男性 2 名，女性 13 名）の協力を得た。事前準備として，SP 養成者が，①シナリオの理解，②演技の練習，③フィードバックの練習を各 2 時間行った。脳梗塞後の麻痺、喘息、糖尿病、子宮摘出後の患者など６シナリオで実施した。

２）１年次生を対象にした高齢 SP との看護面接演習８ヶ月後にグループインタビューによる半構造化面接を用いて,1 時間程度のインタビューを行い,データを収集した。グループインタビューの逐語録を作成し，意味内容ごとにコード化を行った。コード化したものを学生の気づきや学び，認識などに関する意味内容の類似性，相違性を検討しながら帰納的に分類し，サブカテゴリー，カテゴリーを抽出した。

３）オンラインによる看護面接ロールプレイ
オンラインによるコミュニケーション教育用の動画を視聴し、トランスクリプトをもとに、コミュニケーションスキルを分析し、スキルによる相互作用の理解を促した。その上で、ブレイクアウトルームに分かれ、学生同士の看護面接ロールプレイを実施した。2 大学の 1 年生 210 名を対象に、前期の基礎看護学演習において、看護面接 DVD（要改善例と良い例）を用いてコミュニケーションスキルを学習後、オンライン会議システムによりロールプレイを行った。講義後の学び（自由記述）とコミュニケーションスキル自己評価表（共感、受容、傾聴等に関する 16 項目）の提出を求めた。講義後の学びを質的分析、自己評価は大学別に 2 群比較を行った。

４）2022 年度末の 2 月に、１年次生を対象に対面の看護 OSCE（形成的評価）を実施した。事前に個人属性（高校時代のクラブ活動、現在のサークル、アルバイト、家族構成、高齢者との同居の有無）及び、コミュニケーション能力評価として①情動能力（Emotional Intelligence：EI）の指標として TEIQue-SF 日本版、②共感能力を測定する JSE（HP-Version）日本語版、③基本的コミュニケーションスキル測定尺度（iksy）および、④看護師における患者とのコミュニケーションスキル測定尺度を用いた。性格調査としては、日本版モーズレイ性格検査（MPI）を実施した。客観的評価である看護 OSCE で

は、課題①片麻痺のある患者とのコミュニケーション、課題②軽度認知症のある患者とのコミュニケーションの２課題を実施した。看護 OSCE の項目は、20 項目（コミュニケーション 6 項目、情報収集 7 項目、環境整備または車いす移乗 7 項目）とした。模擬患者と 15 分間の看護面接とケアを行なった。看護 OSCE の評価は、各項目を 1 点として集計した。分析は、SPSSver28.0 を用いて各項目についてノンパラメトリック検定を実施した。

５）文献及び、研究代表者が実施している既存の SP 参加型教育の効果を踏まえ、1～４年間のコミュニケーション教育プログラムを作成した。

４、研究成果

１）１年次看護学生と高齢 SP との看護面接演習の効果

2022 年 4 月より、研究代表者が新設大学看護学部に異動となり、2019 年度と同様に、１年次生を対象（n=106）として、高齢 SP 参加型看護面接演習を実施した。その前後でコミュニケーションスキル自己評価表を実施した。コミュニケーションスキル評価表は「情報収集」「共感・受容・傾聴」「視線観察態度」の３因子から構成される。合計点では演習前（平均 57.12±7.29）と演習後（平均 66.55±9.03）の比較において有意差が見られた(p<.00)。また、因子毎でも、「情報収集」(p<.00)「共感・受容・傾聴」(p<.01)「視線観察態度」(p<.00)と有意差があった。この結果から、１年次看護学生に対する高齢 SP との看護面接演習を実施することでコミュニケーションスキルの評価が高まったと認識していることが明らかになった。

２）１年次生を対象にした高齢 SP との看護面接演習８ヶ月後の学び

学生はこの演習から【コミュニケーションスキルの重要性】を認識し，【高齢者の多様性理解】や【患者心理への気づき】を得て，SP の【フィードバックが導く行動変容】を起こしていた。また，【理論と実践を結びつける体験学習】と認識し，【入門実習へのレディネス】を高めていた。入門実習では【未体験の高度なコミュニケーション対応】の課題が明らかになった。（黒澤他　2021）

３）オンラインによる看護面接ロールプレイ

オンライン看護面接は、相槌や目線等のマイクロスキルに注視が可能であり、共感、傾聴、受容等の看護師としての専門的コミュニケーション技術の学びにつながったと考えられる。2 大学間比較では、実習経験済みのＢ大学と実習未経験の A 大学とで「傾聴・共感・受容」因子に差がないことから、オンライン看護面接の汎用性が示唆された。

Kolb の経験学習サイクルとして、経験から省察、概念化、新しい経験への応用・試行へと思考が深まり、マイクロスキルの活用が、傾聴、共感、受容を促進させることが示唆された。また、オンライン看護面接のロールプレイは、対患者面接の準備に向けた学習機会となり，相互理解に向けた面接技術の修得につながることが示唆された。（山本　2022）

４）１年次の６月に高齢 SP と看護面接を実施した８ヶ月後に、研究同意の得られた１年次生を対象に、①片麻痺のある高齢者（男性）患者への環境整備と②軽度認知症のある利用者（女性）への車椅子への移乗の２課題の看護 OSCE(形成的評価)を実施した。高校時代のクラブ活動の経験者の有無で、課題②コミュニケーションで有意差があった（$p<0.05$）。初年次の看護 OSCE の結果と生活体験との関係では、高校時代のクラブ活動の経験者は課題②軽度認知症の高齢者とのコミュニケーションがクラブ活動未経験者に比べて高かった。クラブ活動の縦社会の中で、他者の意見を受け入れる等の人との交流が生活の中で行われていたことから、事例での予想外の発言を受容し会話ができていたのではないかと考える。

また、コミュニケーション能力尺度である①TEIQue-SF 日本版および②JSE（HP-Version）日本語版を測定した③基本的コミュニケーションスキル測定尺度（iksy）および④看護師における患者とのコミュニケーションスキル測定尺度の 4 つの尺度の結果と２課題の看護 OSCE の総合点との関係性は見られなかった。課題の内容は既習内容であるが、情報収集と環境整備及び車椅子移乗を同時にすることには慣れておらず、コミュニケーションがうまく取れていない可能性があると考える。看護はケアをしながら声かけをして安心・安全に実施することが求められているため早い段階から声かけとケアを同時に実施する練習を重ねていく必要性が示唆された。

５）高学年には多職種連携医療に求められるチームコミュニケーション能力を育成することが重要である。前任校で５年次医学生 284 名、５年次役学生 380 名、４年次看護学生 76 名を対象とし、症例を用いて学生が各職種の立場から模擬患者にアプローチし、その問題点を互いに検討しながら患者のケアプランを作成する３時間の IPE プログラムを実施した。IPE の効果として、「今後の病院/病棟実習に役立つと思いますか？」に対して、いずれの学部生も 91%以上が肯定的な回答であった。また、「将来の自分の仕事に役立つと思いますか」「今回の実習に対して満足していますか」に対していずれの学部生も 88%以上が肯定的な回答で、学部間でも有意な差は認められなかった。このような模擬患者参加型 IPE は医療従事者の専門職能を生かしたより質の高い安全な医療の実現に寄与できるものと思われる。（後藤他　2017）

６）これらの試験的取り組みを総合し、４年間の高齢者に対応できるコミュニケーション教育プログラムを下記のように検討した。

１年次：前期の早期に高齢模擬患者とコミュニケーションを図り、高齢者の理解を深める。

2 年～3 年次：症例別に、模擬患者との看護面接を実施する。慢性期疾患、急性期疾患、精神疾患、認知症など、さまざまな事例を学ぶ中で、症例ごとのコミュニケーションの方法を学ぶ。また、看護過程の展開において、模擬患者から情報収集し、アセスメントを行なった上で、ニーズに合わせたケアを模擬患者に実施する。実習前に看護 OSCE にてコミュニケーション能力、手技、態度を評価する。

４年次：他学部の医療職の学生と多職種連携教育を実施し、チームコミュニケーション能力を育成する。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　7件／うち国際共著　2件／うちオープンアクセス　7件）

１．著者名 Claudia Schlegel, Cathy Smith, Keiko Abe, Roger Kneebone.	４．巻 38(7)
２．論文標題 Onomatopoeia-Listening to the sounds behind the words	５．発行年 2021年
３．雑誌名 GMS Journal for Medical Education	６．最初と最後の頁 1-3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3205/zma001519	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 Mina Suematsu, Okumura Kenich, Hida Takeshi, Noriyuki Takahashi, Kentaro Okazaki, Etsuko Fuchida, Keiko Abe, Hiroyuki Kamei, Manako Hanya	４．巻 12
２．論文標題 Students’ perception of a hybrid interprofessional education course in a clinical diabetes setting: a qualitative study	５．発行年 2021年
３．雑誌名 International Journal of Medical Education	６．最初と最後の頁 220-229
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5116/ijme.6165.59e0	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 黒澤昌洋，山本恵美子，山中真，阿部恵子	４．巻 20
２．論文標題 高齢模擬患者参加型演習に参加した1年次看護学生のコミュニケーションに関する8ヶ月後の認識	５．発行年 2021年
３．雑誌名 愛知医科大学看護学部紀要	６．最初と最後の頁 19-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 14. Mina Suematsu, Noriyuki Takahashi, Kentaro Okazaki, Etsuko Fuchita, Akira Yoshimi, Manako Hanya, Yukihiro Noda, Keiko Abe, Masafumi Kuzuya	４．巻 12
２．論文標題 novel online interprofessional education with standardised family members in the COVID-19 period	５．発行年 2020年
３．雑誌名 International Journal of Medical Education	６．最初と最後の頁 36-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 末松三奈，若林唯，高橋徳幸，岡崎研太郎，半谷眞七子，渕田恵津子，阿部恵子，鈴木裕介，葛谷雅文	4．巻 22(2)
2．論文標題 認知症医療・介護における多職種連携に対する認識：日本とスコットランドの看護師の語りによる質的分析	5．発行年 2020年
3．雑誌名 地域ケアリング	6．最初と最後の頁 67-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Mina Suematsu, Sundari Joseph, Keiko Abe, Hiroki Yasui, Noriyuki Takahashi, Kentaro Okazaki, Jenni Haxton, Morag McFadyen, Patrick Walker, Lesley Diack.	4．巻 80
2．論文標題 A Scottish and Japanese experience of patient-centred diabetic care: descriptive study of interprofessional education on live webinar	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Nagoya Journal of Medical Science	6．最初と最後の頁 465-473
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18999/nagjms.80.4.465	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 1.末松三奈,阿部恵子,安井浩樹,朴賢貞，高橋徳幸，岡崎研太郎	4．巻 50(2)
2．論文標題 多職種連携教育ゲーム(Interprofessional Education Game:iPEG)日本語版の開発	5．発行年 2019年
3．雑誌名 医学教育	6．最初と最後の頁 199-202
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計27件（うち招待講演　2件／うち国際学会　18件）

1．発表者名 Cathy Smith, Tanya Tierney, Keiko Abe, Reem Nasser Al-Ajmi, Cludia Arancibia Savio, Ann Bellot, Jim Blatt, Carol Fleishman, Huang Hua, Tang Jian, Elizabeth Kachur, Nicola Ngiam, Martina Plag, Valina Peters, Claudia Schlegel,Laura Shen, Meghana Sudhir
2．発表標題 Global perspectives: Challenges and opportunities related to SP practice in the time of COVID-19
3．学会等名 APSE VIRTUAL CONFERENCE（国際学会）
4．発表年 2021年

１．発表者名 Keiko Abe
２．発表標題 Adaptation to the impact of COVID-19 in communication education with SPs: Japanese experiences
３．学会等名 Korean Medical Education Conference（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Keiko Abe, Cathy Smith, Tanya Tierney, Reem Nasser Al-Ajmi, Cludia Arancibia Savio, Jim Blatt, Carol Fleishman, Elizabeth Kachur, Nicola Ngiam, Shang-Po Kao, Meghana Sudhir
２．発表標題 Simulated/Standardized Patient (SP) methodology in the time of COVID-19: Learning and assessment adaptations in different countries
３．学会等名 The 53th Japan Society Medical Education Conference, VIRTUAL CONFERENCE（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 渕田英津子、阿部恵子、末松三奈、内山靖、高橋徳幸、野田幸裕、吉見彰、岡崎研太郎、池松裕子、玉腰浩二
２．発表標題 模擬患者参加型多職種連携教育の“これまで”と“これから”
３．学会等名 第31回日本看護教育学学術集会　オンライン開催
４．発表年 2021年

１．発表者名 Keiko Abe, Cathy Smith, Carol Fleishman, Elizabeth Kachur
２．発表標題 Cultural Challenges: Applying ASPE SP Standards of Best Practice Internationally
３．学会等名 IMSH conference（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Cathy Smith, Beate Brem, Keiko Abe, Jim Blatt, Carol Fleishman, Henrike Hoelzer, Elizabeth Kachur, Reem Nasser Al-Ajmi, Claudia Schlegel, Nicola Ngiam, Louise Schweickerdt,Tanya Tierney
２．発表標題 SPs as Partners - Perspectives from the International Committee
３．学会等名 APSE VIRTUAL CONFERENCE（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 阿部恵子、石川和信、小林元
２．発表標題 OSCE（客観的臨床能力試験）時代のSP（模擬患者）参加型医学教育の問題点とその対策
３．学会等名 第52回日本医学教育学会（オンライン開催）
４．発表年 2020年

１．発表者名 阿部恵子
２．発表標題 多職種連携を促進する異文化理解とコミュニケーション
３．学会等名 第6回日本NP学会学術集会（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Keiko Abe, Manako Hanya, Michiko Goto, Masahiro Kurosawa, Makoto Yamanaka, Kazuhiko Fujisaki
２．発表標題 Factors to affect SP performance: findings from the nationwide survey
３．学会等名 22nd East Asian Forum of Nursing Scholars（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Henrike Holzer, Keiko Abe, Carol Fleishman, Elizabeth Kachur, Louise Schweickerdt, Cathy Smith and Jim Blatt
２．発表標題 It’s Not the Same Everywhere: perspectives on the ASPE Standards of Best Practice from Across the Globe.
３．学会等名 ASPE Annual Conference（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Keiko Abe, Michiko Goto, Chicaco Inoue, Kaho Hayakawa
２．発表標題 NINJA AGAIN! Transformation by using behavioral change Model
３．学会等名 ASPE Annual Conference（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Kaho Hayakawa, Rintaro Imafuku, Chihiro Kawakami, Koji Tsunekawa, Keiko Abe, Kazuhiko Fujisaki.
２．発表標題 Learning with, from and about each other in nationwide workshops for SPs and SP educators
３．学会等名 ASPE Annual Conference（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Keiko Abe, Cathy Smith, Carol Fleishman, Elizabeth Kachur.
２．発表標題 Cultural Challenges: Applying ASPE SP Standards of Best Practice Internationally
３．学会等名 IMSH conference（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Keiko Abe, Yaeko Terada, Masako Miura, Manako Hanya.
２．発表標題 SPs portraying Standardized Visiting Nurses to train Nurse managers in community
３．学会等名 Association of Standardized Patient Educators（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Henrike Holzer, Keiko Abe, Carol Fleishman, Elizabeth Kachur, Louise Schweickerdt, Cathy Smith and Jim Blatt
２．発表標題 Challenges of Working with Faculty-Perspectives from around the World. SPE Annual Conference
３．学会等名 Association of Standardized Patient Educators（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Keiko Abe, Manako Hanya, Michiko Goto, Masahiro Kurosawa, Makoto Yamanaka, Kazuhiko Fujisaki.
２．発表標題 Factors to affect SP performance: findings from the nationwide survey
３．学会等名 22nd East Asian Forum of Nursing Scholars（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 阿部恵子、半谷眞七子
２．発表標題 模擬患者(SP)の役割拡大の可能性：家族や医療系専門職を演じたSPの意見から
３．学会等名 第50回日本医学教育学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 溝江弓恵、渕田英津子，阿部恵子，本田育美，寺田八重子，三浦昌子
２．発表標題 臨床看護師と看護教員の協働による認知症模擬患者参加型演習の学習効果
３．学会等名 日本老年看護学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Keiko Abe, Cathy Smith, Tanya Tierney, Reem Nasser Al-Ajmi, Cludia Arancibia Savio, Jim Blatt, Carol Fleishman, Elizabeth Kachur, Nicola Ngiam, Shang-Po Kao
２．発表標題 Simulated/Standardized Patient (SP) methodology in the time of COVID-19: Learning and assessment adaptations in different countries
３．学会等名 The 53th Japan Society Medical Education Conference（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Keiko Abe, Nicola Ngiam, Elizabeth Kachur, Valina Peters, Tanya Tierney, et al
２．発表標題 Feedback from Around the World
３．学会等名 ASPE International Committee Webinar（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Cathy Smith, Nicola Ngiam, Keiko Abe, et.al
２．発表標題 Technical failure between web SP training and SP performance in person OSCE
３．学会等名 ASPE conference（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Lam Ching Yee, Thaneemalai Jeganathan, Keiko Abe, Giselle Nobleza, Nicola Ngiam, et. al
２．発表標題 SP Involvement in Inter-professional Education in An Introduction to SP methodology in Asia
３．学会等名 Asia SPEC Webinar（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Nicola Ngiam, Thaneemalai Jeganathan, Keiko Abe,et al
２．発表標題 SP Case Writing Webinar
３．学会等名 Asia SPEC Webinar（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 山本恵美子、中山綾子、志水己幸、阿部恵子
２．発表標題 看護基礎教育のコミュニケーション能力育成に向けたオンライン講義による「看護面接場面の学び」の検討
３．学会等名 日本看護学教育学会第32回学術集会
４．発表年 2022年

１．発表者名 阿部恵子、後藤道子、吉田登志子、井上千鹿子、早川佳穂
２．発表標題 多様性の時代に対応できる医療者育成：模擬患者参加型医療面接教育に患者の個別性をどう盛り込むか
３．学会等名 第54回日本医学教育学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 後藤道子、高野雅美、阿部恵子
２．発表標題 様性の時代を生きる患者の個々のストーリーをどのように伝えるか
３．学会等名 ヘルスコミュニケーションウィーク2022名古屋
４．発表年 2022年

１．発表者名 秋山 優美，上杉裕子，阿部恵子
２．発表標題 コロナ禍におけるオンライン実習のコミュニケーションに関する学習効果の実態
３．学会等名 ヘルスコミュニケーションウィーク2022，名古屋
４．発表年 2022年

〔図書〕　計4件

１．著者名 内山　靖、藤井浩美、立石雅子編	４．発行年 2020年
２．出版社 医歯薬出版株式会社	５．総ページ数 143
３．書名 リハベーシックコミュニケーション論・多職種連携論	

１．著者名 1.阿部恵子	４．発行年 2018年
２．出版社 篠原出版新社	５．総ページ数 404
３．書名 医学教育白書2018度版(‘15~’18)，日本医学教育学会編集	

１．著者名 安井浩樹編、野呂瀬崇彦、阿部恵子、網岡克雄、後藤克幸、櫻井しのぶ、鈴木一吉、染野徳一、山口みほ、棚橋嘉美、細谷志帆	４．発行年 2019年
２．出版社 京都廣川書店	５．総ページ数 284
３．書名 エピソードから地域に根ざした医療とケアのあり方を考える	

１．著者名 阿部恵子	４．発行年 2022年
２．出版社 篠原出版新社	５．総ページ数 424
３．書名 医学教育白書2022度版(‘19~’22)，日本医学教育学会編集	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	後藤　道子 (Goto Michiko) (10608946)	三重大学・医学部・講師 (14101)	
研究分担者	伴　信太郎 (Ban Nobutaro) (40218673)	愛知医科大学・医学部・特命教授 (33920)	
研究分担者	半谷　眞七子 (Hanaya Manako) (40298568)	名城大学・薬学部・准教授 (33919)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	出原　弥和 (Miwa Izuhara) (80320985)	名古屋学芸大学・看護学部・准教授 (33920)	
研究分担者	山中　真 (Yamanaka Makoto) (30507504)	愛知医科大学・看護学部・教授 (33920)	
研究分担者	黒澤　昌洋 (Masahiro Kurosawa) (00586068)	愛知医科大学・看護学部・准教授 (33920)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関